九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[015] 九大國文學會誌

https://doi.org/10.15017/7429630

出版情報：九大国文学会誌. 15, pp.1-41, 1939-02-01. 九州帝國大學國文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九大國文學會誌

第十五號

昭和十四年一月發行

春日先生還曆記念特輯
卷頭言……一
記錄……二
寄稿……三
雜錄……四

九大國文學會

九大國文學會總會

昭和十三年五月二十九日

二長閣
九大國文學會總會
於三長閣

記念號特輯に際して

小島吉雄

昨春四月一日を以て還暦に達せられた春日先生は、をち返る藥を召させられたかと疑はれるほどに、いよいよますます御元氣に渡らせられ、先生御自らも、八十、九十まで生きながらへて學問の新しい林に分け入るつもりだと自信を以て仰せられてゐる。我々門下生にとつて、此れ以上の悦びはない。乃ち、茲に先生の壽を頌し、且つは謝恩の一端を披瀝するために、此の記念號を特輯する。願はくば、先生が、八十年、九十年はおろか彭祖が七百歳の壽を保たせられて、永くわれらの行く手を導き給はむことを只管に請ひのむ次第である。

而してまた、われらは身におほけなき師恩を思ふにつけ、先生御垂示の和の精神を體して一層わが九大國文學會の發展を策すると共に、いよいよ學業を顯揚して邦國文化に寄與するを心掛け、以て師恩の萬分一に報へたてまつらねばならぬことを思ふのである。

僭越ながら、一言蕪辭を連ねて卷頭言とする。

―記　錄―

式典

昭和十三年五月二十八日は記念すべき日であつた。朝から小島先生と笹月先生、その外の方々は今日の式典がいやがうへにも立派なものになるやうにと非常に細かい注意をなさつてゐられた。私達は多くの卒業生の方をお迎へしたことが一つのよろこびであつた。大勢の參會者の中でも、これら日頃直接先生の御恩にあづかつてゐるものは特に感激して式の始まるのを待つた。春日先生御夫妻の自動車が玄關に横づけになり、御夫妻は暫らく控へ室で御休みになつた。愈々式が始つた、三番教室である。裝飾はゆきとゞいて式場は壯嚴であつた。兒島喜久雄先生の筆になる御肖像畫が二つならべてあつたが、その出來榮えのよいのを參列者はありがたく思つてゐた。春日先生御夫妻は襟に徽章をつけて靜かに椅子についてゐられた。

式辭は次にかゝげる通りである。

實行委員として小島先生の御挨拶はじめ一同は森として耳をかたむけた。春日先生もじつとそれをきいてゐられた。式辭が終り祝電が披露された。次に記念品の贈呈が行はれ、先生がそれをおうけになり謝辭をのべられた。平素と少しもかはらぬものやはらかな御口調であつたが御心中如何ばかりであつたらうか。一同襟を正して御尊顔を仰いだ。まことに思出深い式典であつた。（城島）

實行委員代表挨拶

本日は御多用中にも拘らず多數皆樣の御來集の榮を得まして かくも盛大なる春日先生還曆祝賀記念式を擧げ得ましたことは我々實行委員一同の深く感謝致してをる所でございます。

また春日先生御夫妻には我々の懇請をお容れ下さいまして本席に御來臨下さいましたことを厚く御禮申上げます。

さて、先生は長野縣の御出身でゐらせられまして長野縣師範學校、東京高等師範學校を經て京都帝國大學文學科を御卒業あり、やがて奈良女子高等師範學校教授に任ぜられ更に大正十五年六月當九州帝國大學教授に轉任せられまして國語國文學講座を御擔任になつたのであります。爾來十幾星霜先生はその深奥なる御學識

と高邁なる御人格とを以て後進の薫陶に當られ、且つ國文學研究室の充實整備に御盡瘁遊ばされました。仍つて此のたび先生が華甲の壽をお迎へ遊ばされまするに當つて日頃の御恩顧を蒙り先生の高風をお慕ひ申上げてゐる國文學科出身者の間に頌壽のための記念事業を實行致したいとの議が起りましたので學部長とも相談致しましたるところ、先生の御知己、御教へ子は全國に亘つてをられまするので、その皆々樣と共に此の喜びを共にしたいと存じました結果、春日教授還暦記念會を設け廣く先生の知己、門弟の方々にも御參加をお願ひ致しましたるところ、お蔭をもちまして五百名に達する多數の方々の御參加を得まして無事豫定の事業を遂行することが出來まして本日此の綠色濃き佳日に祝賀記念式典並に記念品贈呈式を擧行するの運びに至つたのであります。

春日先生の御誕生は明治十一年の四月一日でございますから本來ならば去る四月一日の御誕生日に式を擧げる筈でございますが先生の御都合をもお伺ひ致しまして今日取行ひまするとに致した次第であります。

還暦記念會の事業と致しましては第一に御肖像畫の作製、第二に記念品の贈呈でございますが、御肖像畫は本學部豐田、小牧、矢崎諸教授の御斡旋によりまして東京帝國大學助教授兒島喜久雄氏に御依賴致し同畫伯の特別なる好意に依りまして茲に掲げましたやうな二面の肖像畫が出來上り一面を大學に一面を春日先生に贈呈申上ぐることに致し、先生の分は記念品代と一緒に本日此れを差上げるわけであります。斯くの如く滞りなく事を運ぶを得ましたることは一つは春日先生の御高德のたまものであり、また一つは法文學部教官各位をはじめ御參加の皆樣方の御助力の結果でありまして、わたくし等の感激に堪へないところでございます。

以上開式に當りまして實行委員を代表して事業經過報告をかねて一言御挨拶を申上ぐる次第でございます。

春日先生と御奥樣及び本日御列席下さいました總長閣下並に諸君に重ねて厚く御禮を申上げます。

總長祝辭

本日我が畏敬する春日政治博士の還暦記念式が擧げられまするに方り茲に大學を代表して矍鑠たる博士の壯容を仰いで其の長壽を御祝ひ申上げることの出來まするのは私の最も光榮とするところであります。

博士は身を處するに謹嚴人を導くに懇切學を究むるに眞摯な方でありまして其の溫厚圓滿な人格は常に子弟德化の源泉となり一

度其の謦咳に接すれば博士の高風を欣慕しないものはない有樣でありまして吾人が博士を得難き大教育家として敬仰する所以であります。又學究者としての博士は最も至難とせらるゝ古代佛書儒書の訓點本の研究に畢生の努力を傾倒せられ假名文字及文體の歷史的研究に對する造詣極めて深く我國語國文學界の權威であらせられることは衆知の事實でありますが他面博士が本學の向上に盡瘁せられたるところも眞に多く就中附屬圖書館長在職中貴重書の目錄解題の作製に躬ら手を下されましたことは吾人の感謝措く能はない處であります。凡そ壽は元より之を賀すべきであります。況んや國家社會に功業ある人士の壽に於て特に然りであります。私は此の意味に於て敢て茲に博士の功德を頌し今後更に博士が悠々自適益々調護を加へられ龜鶴千年の齡を重ねられまする樣祈つて已みませぬ。

極めて簡單でありますが之を以て祝辭と致します。

昭和十三年五月二十八日

九州帝國大學總長　荒　川　文　六

學部長祝辭

本日茲に文學博士春日政治先生の還曆祝賀記念式を擧行せられまするに當り我が法文學部を代表して祝辭を呈し得ますることは洵に光榮の至りに存じます。

學者としての博士の令名は今更申すまでもないことでありますが、博士は特に國語學を專攻遊ばされ點本の國語史的研究並に假名發達の歷史的研究に於ては我が邦の第一人者であらせられまして前人未發の卓說を續々發表して學界を裨益せられてゐるのであります。仄聞致しまするに點本の研究は國語學上最も樞要のことに屬してゐるのでありまするが、その研究はまた難中の至難事とせられてゐるといふことであります。春日博士は故大矢透博士の遺業を繼承せられましてよく此の困難なる研究を大成せられたのであります。而も博士の御造詣は啻に古訓點の研究のみに止まらず廣く國語國文學の全領域に亘つてをりまして平素私共が博士とお話申上げてをりましても博士が常に學問上の新しい話題をお有ちになつてゐることにはいつも敬服申上げてをる次第でございます。

凡そ學問は高邁なる人格を俟つて初めてその價値を發揮するものでありますがわが春日博士は承りますれば學生の頃に既に君子と呼ばれてその師友の畏敬を受けてをられたさうであります。蓋しその謹嚴にして篤厚なる御人格がその少靑年時代に於て早くも衆望をあつめてをられたのでありまして、かゝる人格者が學者と

して身を樹てられたことは誠に國家の一大慶福事だつたと申さねばなりません。されば博士は帝に學者として成功せられたばかりでなく更にまた教育者としても一代の師表でいらせられましてその教へ子は全國に洽くその德化は總べての教へ子の上に行渡つてゐるのであります。わが法文學部と致しましても博士の御惠澤を蒙ることが實に深く大きいのでありまして、即ち博士は創設直後の學部長となりその圓滿な御德望をもちまして基礎未だ定まらなかつた學部を統括せられよく學部の今日あるを得しめられたのであります。また最近附屬圖書館長に就任せられては圖書の整理に將たその設備の充實に多大の貢獻がありましたし、國語國文學講座擔任教授としては慈父慈母にもまさる愛情を以て懇切に學生を指導薫陶せられ博士の教室に學ぶ者は專門の知識を授けられると同時に、更らに博士の御人格に德化せられて人格陶冶の實を擧げ得たのであります。私共は博士の此の大きな御功勞に對して此の機會に深く感謝の意を表したいと存じます。

御見受け致します所では博士は御還暦とも思はれない程若々しく御元氣でいらせられますが、茲に謹んで博士の壽を頌祝申上げると共にまた博士の學德をも讃仰致し併せて玉齡彌々豐かに學界のため邦家のためなほ一層御健在の程をお祈り申上げます。

昭和十三年五月二十八日

九州帝國大學法文學部長　河村又介

友人總代祝辭

春日博士今日の記念祝賀會に際し僭越乍ら私が早く御交誼を得たと云ふ理由で祝辭を述べます。はじめて春日博士に御面會したのは明治四十五年春の頃と考へますが、爾來實に廿五年餘一夢の如く去つて當時を追憶致すと感慨無量であります。私は博士の御追憶のためにこれを述べて居るのでありますが、その當時明治四十四年の春日樣は京都帝大文學部を第一回に卒業されて御研究中でありました。私はその歳外國に旅立まして大正三年冬に歸朝致しますと、その前年大正二年に春日樣は奈良女子高等師範の教授になつて居られました。この前後奈良に於て或は京都に於て私は御面會する毎々春日樣の渥厚篤實な人格に對し敬服の念を深くするのみでありました。奈良の生徒又は卒業生からは度々春日樣の深い學識と親切鄭寧な、しかも少しも弛みの無い御授業の樣子を承つてゐたのであります。

春日神社の祭の古事儀式に或はその蹴鞠の會に或は夜能に或は又京都の學會にさては又風雅な集會などに私はその當時度々御同

席することを得たことを今も思浮べて居りますが奈良、京都の如き古文學の遺蹟多く、又その雰圍氣の多い地境に對して春日樣の如き研究業績と人格とが眞に好く適應して居ることを考へさせられたことは度々であつたのであります。

大正十四年私は本學に參りまして翌年春日樣を御迎することを得たのでありますが、その折この古代文學。研究者をあの美しい奈良、京都の地境からこの當地萬葉の故地ではあり乍ら今は慨して文學には緣遠いこの地に御迎することがいかに無理であるかは充分に考へて居りました。然し幸に御來任を見まして同じ學府に御同席するを得たことは私にとりて大なる欣でありました。果して當地に於ては御研究のための文獻蒐集に多くの御困難があつたのであります。それにも拘はらず春日樣は續々研究の成果を更ねられ更に學部發達のために重要なる任務までも御擔當になりました。

春日樣の學問上の御業績に就ては既に總長、法學部長の祝辭に述べられてある通り普く世人の認むる處でありますが、大學の教授の當然の任務としての研究及びその發表は勿論、又大學の教授としての資格に必要なる教育の上の御功績も亦頗る美事なものであつたことを私は確信するのであります。今回還曆の故を以て御退職になつたことは誠に慶賀の至でありますが、また友人一同實に御名殘惜しく感じて居るのであります。春日樣には御健康も宜しく拜しますが今後益々御壯健を祈ります。御住居には雲出鳥還處と云ふ淵明の詩句に出た號がありますが、この御心境に於て御學識と御人格とが今後一層廣い範圍に亘つて感銘を與へられることを吾々友人一同は希願して居るのであります。

昭和十三年五月二十八日　　友人總代　長　壽　吉

門下生總代祝辭

本日茲に恩師文學博士春日政治先生の御還曆記念の式を迎へまして、愈々御健安に渡らせられます先生にお祝の詞を申上げますことは、私共門下生一同の洵に感激に堪へない所であります。

先生には大正十五年十一月から本年三月まで、わが九州帝國大學法文學部の國語國文學講座擔任教授として、私共に國語學並に國文學に關する該博精到な御講義をして下さいました。國語學の御講義におきましては、一方には、國語の本質に基づく先生獨自の體系によつて構成されました概論があり、他方には、探究到らざる所のない極めて精緻な、實證的な國語史の御講義がございました。國文學の御講義におきましては、古代奈良朝平安朝の各文學史の御講義と萬葉集及び源氏物語を中心とする上代文學作品の

演習とがございました。國語學の御講義にありましては、國語事實の峻烈なる究明によつて國語の本質を明かにせられ、翻つて國文學の場合には、豐かな詩的直感の力に基づく解釋によつて文學作品を深く味讀味到し、一つの作風としての文學の事實を實證的に追求して以て文學の本質に參ぜられた御講義でありました。蓋し、兩者を通じて先生が熱心に私共にお示し下さいましたことは對象を實質的に、從つてまた常に歴史的に把握すべきこと、しかもそれは決して單なる事實の蒐集を意味すべきでなく、深くその本質につき入ることでなければならないといふことであつたと申すことが出來るのであります。このやうな御講義はすべて一に先生の廣く深い御造詣に因るものであることは申すまでもありません。先生の御學問は、先づ國語學の方面について拜しますならば、御研究はその全領域に亘つてゐますが、中でも、かの有名な訓點の御研究が先生の學界に對する御貢獻の中最も著しい功業として存するのであります。石山寺東大寺西大寺或は正倉院等の千載の秘庫に藏されてゐる佛典漢籍等の訓點は、その施されました時代が確實でそのまゝに殘つてゐることと及び國語讀みの醇粹であること、しかも相當の分量に上つてゐることなどから、國語の音韻文字語彙語法等あらゆる問題についてのすぐれた研究資料なのであります。しかるにこれらの訓點は「近世國學者の未だ殆んど研究し得なかつた所でありまして、先生が景仰にたへぬ學者としてよく私共にお話し下さいます木村正辭翁などに至つて漸く本格的な研究に入つたに過ぎないのであります。その調査は洵に困難を極めた仕事でありまして、全く超人的な頭腦と性格とを必要とするものであります。先生はこの始んど全く前人未到といふべき境に鍬を入れられ、そこからさまざまの事實を發見されつゝあります。その極く一端のみを申上げますならばかの賀茂眞淵、本居宣長以來難解の語として何人も解くことの出來なかつた古事記の中のソダタクといふ語を石山寺にあります天安二年（一五一八）加點の大智度論の卷第二の刮の訓として發見され、その意義を確定されました如き、又は石山の法華經安楽によつて稅をかける意味のモヤスを、又、西大寺の金光明最勝王經その他によつて、蚊感する意味のチヤスを見出されましたなど、在來の辭書に新に加へるべき事實の發見が頗る多いのであります。ヤウヤウがヤヤクに發し、ダクがムダクに發するなどの御研究は先生の語源研究の僅かな一例であります。又、先生は近世語の成立にもお詳しく、同樣の精緻な御研究によりまして、敬語の助動詞マスの語史を明かにされましたことなどここに一々枚擧するいとまをもちません。かやうな語學的研究をなさいます一方、先生は又生得の詩人でゐられます。かねて自作の童謡集を出版されたこともあり、又、歌

や俳句に一家の風をなしてゐられますなどは、その現れでありまして、この御詩才が先生の文學研究をいかに味ひ深いものにしてゐますかは申すまでもない所であります。

さて、先生は昭和二年九大國文學會をお興し下さいまして、旺んに研究會を催し、更に研究發表機關として雜誌を發行して下さるなど、御講義の外に私共のために容易ならぬ力をお盡し下さいました。その間に私共は先生の御學問のみならず、その圓滿高潔殊に謙虛な御人格に接しまして、眞實を求めてやまぬ生活の如何に尊いかを敎へられ、人生の大道は正に先生が身を以て示されましたこの眞實を求める所にあることを確信せしめられるに到つたのであります。私共門下生は洵に先生の門下たるには足りない者でありますが、しかも各々學問に精進し又育英に全力を傾倒して各自の道を歩くことが出來るやうになりましたことは、一へに先生の御高風に接し、先生の御指導をいたゞきました賜物でございまして、その御恩は到底拙い言葉でこゝに申し盡すことは出來ないのでございます。先生には公の御活動もりつぱにとげられまして御還曆に達せられました。しかも、近來益々お元氣で、學問的熱意に燃えてゐられます。そのことは御還曆のお慶びと共に又私共のお慶び申上げずにはゐられない所であります。どうか一層御健康で御精進を續けられますやう祈上げますと共に又一層私共をお導き下さいますやう切にお願申上げます。甚だふつゝかながら私共の衷心からのお祝ひを申上げました次第でございます。

昭和十三年五月廿八日

門下生總代　笹　月　清　美

挨　拶（春日先生）

私が今春還曆の齡に達しましたについて、過般來當大學をはじめ皆々樣の御配慮によりまして、私の爲に記念會を設立していたゞき、茲に本日をトしてかくも盛大な記念式を御擧げ下さいましたことは、私自身は申すまでもなく、一門の光榮之に過ぎたものはございません。殊に只今は荒川總長閣下をはじめ河村法文學部長、長敎授並に笹月君より御鄭重な御祝詞をいたゞきましたことは、衷心感佩に堪へない所であります。又會よりは私の肖像二面を作つていたゞき、一面は之を大學に殘して、不肖私の如きが、永く跡をこの學園に止めることの出來ますことは、誠に身に餘る光榮を存じ、又一面を私の家庭にいたゞいた上、記念品料まで拜受いたしましたことは、重ね〳〵恐縮に存じます。賜はつた品々は子孫に遺して、永く皆樣の御厚情を感銘いたさせたい心組でご

ざいます。

顧みますと、私は明治三十三年の春初めて人を敎へるといふ職に就きましてから、茲に三十有八年、國家はた學界に對して擧ぐべき寸功のなかつたことを愧入る次第でありますが、幸大過なく今日に至ることを得ましたのは、高敎を受けました恩師諸先生は申すまでもなく、種々の關係を以て知を辱うした諸賢の御厚誼によることゝ深く感佩いたす次第であります。而もそれら御厚誼に對し常に報ゆべくして報い得なかつた私が、今更かゝる御感情に預かること、殊に時恰も國家非常の秋に當り不肖私如き個人がかゝる御感情に預ることは、只々相濟まないといふ感さへ深いものがあります。

人は年を取ると、とかく物事が無精になり、殊に職を退くものは得て因循になり勝ちであります。然るに今日の此の會の私に與へられた感激から聞えるものは、「汝今日より更生して、汝の仕事を續くべく雄々しく踐出でよ。」といふ聲であります。時恰も國家未曾有の非常時に際し、全國民一致して其の執る所の職務に層一層の緊張努力を拂ふべき時であります。不肖私も今日を機會に眞に更生した心持となり、有難い御激勵と御注意とを身にしめて、天の藉す餘命を微力ながら學界に致して、以て本日の光榮の萬一に副はんことを心掛けようと誓ふ次第であります。胸のみ迫つて盡さない申し樣でございますが、之を以て御禮の言葉といたします。

記念展觀・記念講演

春日敎授還曆記念展觀は同日午前十時から午後五時まで法文學部第七演習室で開催された。「中院本萬葉集」「萬葉集書入本」「假名書萬葉集」「活字附訓萬葉集」「古萬葉集」等の萬葉關係圖書「幸于吉野宮之時 柿本人麿作」「柿本朝臣人麻呂羇旅歌」(卷三・加藤千蔭書)(卷一・尾島安都之書)「天平五年三月笠金村贈入唐使歌」(卷八・二川相近書)等の萬葉集關係筆蹟・碑文、並に萬葉集に關する舊稿多數陳列され、參觀者多く盛會を極めた。

尙記念講演は法文學部主催のもとに「國文學と假名」の題によつて十一番敎室で開催。法文學部以外の學内外の聽講者も多かつた。

祝賀宴

祝賀宴は記念式の當夜、博多ホテル(博多驛前)で行はれた。大

學での諸行事が滯りなく終ると會衆諸氏の大部分は晝の感激を内に何んで引續き博多ホテルに歩を運ばれた。受付では參會者は更めて芳名帳への署名をお願ひした。

七時頃開會、祝宴に入つた。席はあらかじめ、或る程度まで、きめておくといふ方法をとつた。舞臺の方を上座として、正面の横列には、當夜の主賓春日先生(奥樣は御缺席)を中心に長老の方々、それと直角に、向ひ合せに席を設けた縱の列が三流れ、全員約八十名であつた。卒業生は極少數を除く外、皆正面に向つて右の端の縱の流れに集まつた。

開宴中は、どこでも樂しい觀談が交はされ、卓上の美しい花と、輝かしい人々の面にシャンデリアの光がふりそゝいで慶祝の氣分は會場一ぱひに漲つた やがてデザートコースになるや、松濤泰巖教授の御司會の下に次いで餘興に入り、福岡市宮野儀助氏社中の狂言「でんでん虫」があつて、會場の氣分は一層和やかなものとなつた。祝辭に入つた 先づ大島直治教授は莊重な口調を以つて別項のやうな祝辭を述べられ、板垣政參教授、諧謔の中に、春日先生の學を好み學を樂しみ給ふ御態度を讃歎されて、何れも會衆に深い感銘を與へられた。次ぎに、福岡縣師範學校長和田兼三郎氏(本年十月神奈川縣師範學校長へ御轉任)が東京高師時代の先生の御同窓として、當時の先生の御生活につき、珍らしくかつ興味深い事どもを紹介され先生の偉大なる御風格につき一層明らかにされる所があつた。その次ぎに、卒業生の側から新谷恒藏兄が立つて祝辭を述べられた。同兄は、師恩を謝し、師の德を讃仰し、諧謔を交へまた熟誠を籠め、先生の御事業にお役にたつことがあればいつでも馳せ參ずるつもりでありますと結んで、すぐれたその祝詞は全會衆の歎賞の的となつた。次ぎに縣廳の川上市太郎氏が、先生の肖像油繪に因んで祝詞を述べられ、そのあとで小生祝電の御披露をした。そこで春日先生は、徐ろに立つて謝辭を述べられ、次いで最後に、田中義麿教授のイニシアテイヴで、春日先生の御健康を祝し乾杯をしてめでたい祝宴の幕を閉ぢた。(笹月)

挨拶 (大島先生)

甚だ僭越でありますが、御許しを得て、春日博士還暦祝賀會を代表して御挨拶を申上げます。春日博士は本年四月一日を以て還暦を迎へられましたので、博士からかねて淺からぬ御交誼を辱うして居りまする僚友、並びに朝夕懇切なる御指導の下に研究を進めて居りまする門下生等、一同相集つて、御喜びの言葉を申上げると同時に、廣く學部外及び學外に於ける博士の知友の方々にも

御出でを願つて、心からなる敬意を捧ぐるの機會を得たいと存じまして、本夕こゝで祝賀の筵を設け、御招き申上げましたところ、博士に於かれましては、本日大學で擧行された記念式に莅まれ、その上御藏書の展覽に關し、態々御說明の勞を執られ、更にまた記念の御講演と、朝から引續いての御活動で御疲勞のところを喜んで御賁臨の榮を賜はり、眞に感謝に堪へませぬ。また御來會の各位に於かれましては、御繁忙の折にも拘らず、遠くより、近くより續々と多數御出でを戴き、本夕の催しに光彩を添へて下さいまして、洵に有り難うございます。併せて厚く御禮を申上げます。

學界並びに敎育界に於ける博士の御業績と御貢獻とに就きましては御列席の各位が疾くに御承知の事であり、また記念式に於ける荒川總長、河村學部長兩閣下を始め各位の御祝辭の中で顯かにされた通りでありまして、こゝで更めて申上げるまでもありませぬ。たゞ、この際特に感じましたことを、そのまゝ述べさせて戴きますならば、博士が今回任滿ちて大學を去られるにあたつては、當局の方々といはず、同僚といはず、門下生といはず、苟くも博士と關りのあるところのすべての人々が、異口同音に、その功を讃へて惜別の情の切なるものを示されたばかりでなく、いざ還曆の壽筵が開かれると聞いては、いはゆる近きものは悅び遠きものは來つて、歡聲かくの如く堂に滿つるといふのは、これは全く博士の御人柄の然らしめるところであつて、外から加へられたのでなく、その溫潤玉の如き人格の底からおのづからにして輝き出でた御光榮であり、御名譽であると申さなければなりませぬ。數千年の昔、老子は功成り、名遂げて身退くは天の道なりと申しましたが、博士はその意味に於て、旣に天の道を全うされたわけであります。しかし博士をして今日あるに至らしめたのは、その非凡なる御經歷の示すところによつて明かなるが如く、過去數十年の間、默々として又矻々として、自己の天職に向つて自彊不息の道を進んでこられたからでなければなりませぬ。「天行は健なり、君子以て自ら彊めて息まず」と申します。博士は卽ち天行に則つて天の道を全うされたのでありまして、そこに眞に惰夫をして起たしめるものがあります。

しかし翻つて考へて見まするに、全しとはいひながら、しかも戰々兢々として尙ほ及ばざることを恐れるのは謙虛なる君子の態度であつて、これまた天の道に應ふことでありませう。博士は功成り、名遂げて「雲出鳥還」の境に安住されるにしても、されば といつて、陶淵明のやうに、これから世と相遺れて、徒に餘生を樂むのを事とされるのでないといふことは、この間福岡日日新聞紙上で御抱負の一端を洩らされたところによつても、また本日式場に於て嚴かに御決心のほどを語られたところによつても明かで

ありまして、たとひ大學の方は御勇退になつても、「木欣々として榮に向ふ」の時、本卦歸りをされたのでありますから、潑剌たる生氣と若い元氣とに充ち溢れた新綠の若葉と共に若返られて、今後更に幾十年、斯道のためます〳〵自彊不息の歩みを續けられることと存じまして洵に欽羨の情に堪へませぬ。

嘗つて福岡が產んだ碩儒貝原益軒先生は朱子の後に生まれて、その書を窺ふことを得たことを以て無窮の幸とされたと承つて居ります。我が九州帝國大學法文學部に於て、いな、汎く我が國に於て、將來國語・國文の學を修むるに當り、我が春日博士の後に生まれたことを何よりの幸とするものの年と共に多きを加へ、源いよいよ濬うして流れいよ〳〵遠く、そして其の流れに汲むものの綿々として永へに絕ゆることのなからんことを切望して已まない次第であります。

本夕は折角御招き申上げましたけれども、ただ、ほんの心ばかりのさゝやかな設けで甚だ申譯なく存じたのでありますが、それにも拘らず、博士には快よく時を移して下さいまして眞に有り難うございます。御來會の各位に於かれましても、どうぞ博士を中心に、ゆつくり御寛ぎになつて、尙ほ十分に歡を盡されるやうに御願ひいたします。

終りに臨んで春日博士の南山の壽をことほぎ、併せて御一家の御繁榮と御淸福とを祈ります。

甚だ蕪雜でありますが、これを以て御挨拶の言葉に代へたいと思ひます。

（昭和十三年五月二十八日、博多ホテル、祝賀晩餐會席上に於て、大島直治）

挨拶（春日先生）

一言御挨拶を申上げます。

今日は荒川總長閣下をはじめ、學內並に學外の各位、殊にわざわざ遠地より御集り下さいまして、私の爲の記念式を盛大にしていたゞいたことは、生涯の光榮誠に感激に堪へない所でありますのに、重ねて今夕はかゝる御盛宴を御張り下さつて、御招待に預りましたことは、御禮の申上げやうもございません。かく御繁多中晝といひ夜といひ終日私の爲に御潰し下さることを恐縮に存じますと共に、皆々樣こそ定めて御疲勞の御事と重ね〳〵痛み入る次第でございます。

つきまして只今は又大島教授・板垣教授はじめ皆々樣より御鄭重なる御祝詞をいたゞきまして、厚く御禮を申上げます。不肖一身に關する御讃辭に對しては、何れも敢へて當る所ではなく、却

つて慚汗の背に浹いものがあります。只賜はつた御壽を以て、餘生を出來るだけ長く生きたいと存じます。和田師範學校長の懷舊談には尠からず潤色がありまして、これ亦面はゆい次第でありますが、御蔭を以て私にゆくりなく修學時代の昔を喚び起させて、まさしく三十餘年若返つたやうな思がいたします。特に新谷君が私の今後の仕事に對して激勵して下さつたことは、この上なく嬉しく感ずる所であります。

今日の記念式に於ける私の感激は、立還つた甲子と共に、眞に更生したかの心地を懷かせましたが、更に今夕のこの祝宴に於て、各位の御深情のこもつた壽杯は、萬葉人の所謂月の若變水にも比すべく、之をいたゞいて明日から如何に若返ることだらうかと存じます。誠に有難く頂戴いたしました。

尙今夕は私共夫妻御招待に預かりました處、賤妻事は家庭に小事がありまして、勝手ながら御厚意に背きました失禮を、私より深く御詫いたす次第でございます。

滿堂の各位、茲に謹んで多年の御交情を感謝いたしますと共に、重ねて今夕の御歡待に對して心からなる御禮を申上げます。末ながら各位の御多幸を御祈りいたします。

―寄稿―

逸題

金子善治郎

春日先生が本年四月一日を以て還曆を迎へられていよいよ御健かであられることを心からお祝ひ申し上げたい。

大正十五年十一月の新學期に九州帝國大學の講壇に先生が立たれてから、昭和と改元されてから、もう十三年にもなるのであるが、何だか疇昔のやうにおもはれる。「古代國文學」の御講義を第一聲として、今回の御還曆祝賀式後の御退職記念の御講義を最後として、先生の御聲を御姿を大學の講壇から失つたことは、わたくしたちとして感慨無量である。

わたくしたちは、停年制といふ學内の約束に從つて大學を去られる先生をおひきとめしたい氣持でいつぱいである。先生によつて建てられた國文科の初期の學生のひとりとして、先生の溫容を思ひうかべずに九大を考へることは出來ない。わたくしは、先生の大學に於ける最初の御講義とともに今回の御退職記念の御講義を拜聽し得たことを光榮とするものであるが、今日の來たること

の何ぞ速かなりしよと嘆かずにゐられないのである。

先生を慕うて東西より馳せ參じたものが、今回の九大國文學會の席上に會したが、卒業以來の久濶を叙した友もあつた。數人の子の親として、社會人としての活動振を見かつ聞くにつけ、諸友が學生時代より積極的な性向となつてゐられるやうにおもはれた。卒業後三年間御膝下にあつたわたくしなどは、先生を煩はすこと最も大なるもののひとりであつたに相違ないのに、性來不敏懶惰なわたくしは、先生の學恩に對して報ずるところなく慚愧に堪へない。先生は、大學の講壇を退かれても、古訓點の御研究にいそしまれるといふことである。わたくしは、この席上、わたくしたちにとつて永久に國文科の父であられる先生を光と仰いで、學問のため滅私奉公の念願をかたくした次第である。

先生御夫妻の御健康を祝福して拙い感想の筆を擱く。

お祝に寄せて

新谷恒藏

わが春日先生が今度めでたく還暦を迎へられたことは門下生一同の深く喜びとする所である。先生の今日までの御仕事については筐月君あたりが詳しく述べられるだらうと思ふので、今は何も書くまい。ただ自分はこの機會に先生の御德をたたへると共に、僭越ながらわが國語國文學界のためにいくつかの希望を申上げたい。又我々門下生——といふよりも自分一個——の覺悟を披瀝して自ら戒めておきたいと思ふ。

先生の御研究、殊に古訓點研究はわが學界ひろしといへども先生獨自のものであり、先生にして初めて完全に行はれるものであらうと思はれる。この困難な御仕事に對して學士院あたりから僅かながら研究費の補助が出てゐることは嬉しいが、もつとかういふ基礎的研究に援護の手をのばしてもらひたい。自分一人の希望を率直に言へば、國立國語研究所を作つて國語國文學の綜合的研究を理想的に完成できるやうにしたい。我々國語學徒は中心となつてさういふ機關の生れる機運を導くやうに一般世間の有志に働きかける義務があるのではなからうか。

國語研究は一見國家に直接役立たないやうであるけれども近頃國語問題の重要性は一般世人の認める所となり、國語愛護の聲は漸く盛となるに至つた。形に於ては國語協會の改組擴大となつて表れてゐるが、その事業成果には大して見るべきものがない。基礎的研究が足らないからである。今次の支那事變に於てわが皇軍が着々戰果を收めつつあるのは、大御稜の然らしめる所なること

勿論であるが、皇軍將兵各位の忠勇義烈の致す所、その蔭には完璧なる銃後の守の外に科學の戰士による精鋭なる武器の製造補給があり、更にその後には純粹科學の絶えざる追究がなくてはならぬ。これは戰時中といへども一日として忽にしてならぬ。（この意味で九大理學部の出現を鶴首する。）それと同じく國語政策的研究と相並んで、否これに先行して國語科學的研究が進められねばならぬ。これは國文學研究にも大きな力を與へるであらう。

春日先生の御壽をお祝ひ申上げるのに我々は世間普通の外形的記念事業を行ふに止まらず、實質的な記念事業を會員各自が計畫し、實行して行きたいと念ずる次第である。去る五月二十八日祝賀晩餐會でも述べたのであるが、深奥なる學識と高潔なる人格の持主たる先生に對して出藍などとは考へることすら出來ない我々は、せめて藍より出た（ランシユツ）證據ぐらゐは殘すべく努力したいものである。多忙なる一田舍教師たる自分も及ばずながら切に努力する覺悟だけはもつてゐる。

終に先生が愈々御健かに御令息共ども斯學に御精進あそばされて、我々後進に範を垂れ給ふのみならず、わが國語國文學界のために新しい世界文化建設の基礎的工作のために益々お盡し下さる事を祈つてやまない。（一〇・一〇）

春日先生の思ひ出

橋本元二郎

一、先生の情熱

先生が國文學科の主任教授として九大へ御越しになつたのは、昭和元年の秋であつた。御赴任後、最初の御講義は「堤中納言物語」の講讀であつた。教室は、たしか、階上の西側の小室であつたと思ふが、窓の外にはポプラの黄ばんだ葉が秋風にさや〳〵と鳴つてゐた。開講のベルで、私達はどんなお方だらうと一種の好奇心（失禮な話だが）を沸して待つてゐると、やがて、先生は入つて來られた。あまり脊のお高くない、いかにも國文學者らしい御風采で、柔和なお顔を心持ち緊張させられて、開講の御挨拶を述べられた。私は、先生のあまりにも若々しい、よいお聲に驚いた。講義に移ると、先生は、そのお聲で「花櫻折る少將」を朗詠された。

「月にはかられて、夜深く起きにけるも……」朗々たるお聲が水のやうに、流れて行つた。皆は、うつとりとして、聞きとれてゐた。

一節を讀み終られると、私は先生のお顔を見上げた。先生はお

顔をぱつと赤ノ染められてゐられた。私はその時、先生の情熱を見た。先生は、奥深い情熱家だ。これが先生の第一印象である。

二、先生のユウモア

金子善治郎君と英文學專攻の天野健次君とが、「舗道」といふ文藝雜誌を出した。その發刊記念會が、天神町交叉點の森永の二階で開かれた。お忙しい中を、先生もお見えになつた。先生の御好意を、金子君は恐縮して喜んでゐた。その頃、國文學會の有志では、小島先生を中心として、「能古」を出してゐたが、春日先生は學習の餘暇に、學生が文藝雜誌を出して創作に精進するのを大へん喜ばれてゐるやうであつた。先生は席上、雜誌を出すと言ふ金子君等の元氣を稱揚されて、その後で狂歌を一つお作りになつた。どんな狂歌だつたかは、今は忘れてしまつたが、なんでも「能古」と「舗道」とを巧にもぢられた面白い、見事なものであつた。一同、先生のユウモアに三嘆した。これは、學究的な、嚴肅な先生の半面であり、先生を敬慕するものにとつては、なつかしい思ひ出である。

また、何時だつたか、先生は、國文學會の會員に、支那料理を御馳走して下さつたことがあつた。支那料理は、私は至つて好物である。充分御馳走になつて、更に最後まで、秦美種君と、清蒸鯉魚の目玉をつゝ突きながら、大いに食ひ物の話をしてゐた。秦君は食通である。秦君が、有明灣のムツゴロウを出せば、私も負けず、大阪のはもの皮を出した。話はあちこちに飛んだ。しまひには、廣東料理の三蛇大會や龍虎大會も出た。生き猿の腦味噌を啜る話も出た。私は、思はず「あゝ、一ぺん食つて見たいなア」と大聲をあげた。あちらのテーブルに居られた先生は、此方を向かれて、

「君はイカモノが好きかね」とお笑ひになつた。先生は靜かに、私達の話を聞いて居られたと見える。

私は、今、淀川や宇治川で鯉を釣つて來ては、清蒸鯉魚をこしらへて、子供と一緒に食べるが、いつも、先生から御馳走になつた支那料理を思ひ出し、先生の御微笑を目に浮べてゐる。

三、先生のノート

先生の御學殖の深さに就ては、私の云々すべき限ではないが、先生のノートや論文を拜見してゐると、いかにも理路整然としてゐて、先生が、文學を、いかに論理的に御取扱ひになつてゐられたかに、思はず襟を正さずにはゐられない。だから、先生の試驗には所謂やまが利かない。この點、甚だ苦手であつた。古文の御解釋も、また、さうであつた。一字一句もおろそかにせられなかつた。殊に、副詞の解釋には、先生獨特の御意見を述べられたことが多いやうであつた。普通の註釋書は、そんな時は駄目であつた。蕪雜な豫習は、全く冷汗ものであつた。私が、研究室に居る

時、先生はよく來られて、辭書をお引きになつて居られた。先生にして、この事は、實に、先生の眞摯な學究的なお心の現れに外ならぬ。私は、いつも、頭の下る思をした。

四、最后に

私が、病氣をして研究室を中途で止めさせて貰つて、先生は非常な御迷惑をかけたことを、甚だ心苦しく思つてゐる。にも不拘先生はその時、寛大な御處置をして下つた。その御高恩に、何一つ酬ゆることのない私……たゞ〳〵先生の御幸福と御一家皆々樣の御繁榮とを、神かけてお祈りする次第である。

道草

高木正藏

春日先生の還暦祝賀記念式には福岡在住の　ハたるの故を以て委員の一人に加へられたが、實は何等の　にもならず、總ては小島、笹月兩先生や研究室の方々が何から何まで世話して頂いて慙愧して居る次第です。

回顧十一年吾が九大國文學がかゝる順調な成長を遂げつゝあるのは洵に喜ばしき限りであります。それは何と云つても春日、小島、笹月三先生の御力の結晶であるは固りであるが同窓諸氏の斯道精進に依るところ亦大なるものがあります。

私の如き在學當時、卒業後を通じて道草を重ねて、常に專攻の國文から逸脱しがちで、專門の研究と云ふ研究の何一つ出來て居ない事を先づ恩師や同窓諸兄に御詫びしなければなりません。しかしこの春日先生の還暦記念式を轉機として今後は國文學研鑽に一路邁進したいと存じて居ます。そして不敏は不敏なりに九大國文學會の事業の一端を脊負ふべき義務を痛感致します。

在學中春日先生の恩命に浴すること三年終に先生の怒氣を含まれた顏を見た事がありません。此の一事は何でもない事のやうで春日先生の御人柄を示すに最も好い例だと存じます。そして何時もあの童顏を輝かしながら源氏を讀み、萬葉を語り、國語學の講述をせられました。たとへ前人未踏の御探究の結果を講義せられるに際しても些かの衒氣も見せられず、淡々たるかに見える講義の中にも自ら湧いて來る情熱に先生の御聲調には力と張とを自びて來て、先生の高潔なる御人格と透徹せる解義に知らず識らず魅せられて了つたものです。次に先生に就て何か逸話をと考へますが、これと云ふ逸話が浮んで來ません。只先般祝賀宴の際、高師で同期生であつたと云ふ前福岡師範學校長和田兼三郎先生が春日先生は初め數學專攻を志して居られたと云ふ話をされたが、先生

の多能なるその方面の才にも惠まれてゐられたのかと喫驚した次第であります。聞く所に依ると御令息は帝大工學部に學んで居られるとの由であるが、先生の理科方面の才は御令息によつて實を結ばうとしてゐるのは、これ亦愈快な話であります。

先生は煙草も酒も嗜まれない稀に見る謹嚴な方でありました。吾々は時折芳賀矢一先生位の酒豪であらせられたらもつと先生に近づき易いのではないかと云ふやうな不埒な考を起した事もあつたが、長く厚情を賜つて居る中に先生の溫い御親切が身に泌込んで來ました。そして己れの欲する所に從つて則を越えずと云ふ人間修錬の極致に達せられた圓融無礙の御人格が吾々の及び難き高さ尊さをもつて吾々の眼前に現はれて來て、良き師を得たる喜びに心中の踊躍を感じます。

其他和歌にまれ、書道にまれ、豊かな天分と趣味とを有せられる事は何人も知る所であります。

今や先生は停年の故を以て一度九大學園を去られましたが、先生一身の御事情の許す限り福岡に永住せられて、陰に陽に末長く御導き下さる事を念願して止みません。

今後九大國文學會はこの偉大なる人格春日先生を始祖として彌榮の發展を遂ぐべきであります。九大國文學の學統と云ふものは春日先生の人格的感化に依つて天下に獨自の色彩と光華とを放つべきであります。此の機此の時道草に道草を重ねた私も同窓諸氏の驥尾に附して正道に復歸しこの愛する九大國文學會隆昌のため微力を盡したい覺悟であります。

終りに春日先生の御健康と御清祥とを祈つて筆を擱きます。

先生の御學風の一端

笹月清美

先生は學問の方法について、あらたまつて教訓めいたことを仰せにはならない。けれども、先生の御學風は、その御生活態度と共に、私共にとつては無限の御教訓を含むものとして仰がれるのである。こゝには、私自身に痛切に感じてゐる右のやうな御教訓の一つを記し、先生の御學風の一端を申述べようと思ふ。

それは、「註釋を重んずる」といふことである。註釋が文學研究の全體系の中で如何に重要な地位を占めるかについては、事々しい理論を述べるまでもない。のみならず、註釋は、決して、理論ではなく實際である。必要なのは註釋論ではなくて、すぐれた註釋なのである。我々は、先生の極めて正確な、極めて深い、つまり對象の本質的なところにふれた御註釋を、演習で拜聽して、

そのことを覺り、註釋の如何に重要であり、又、如何に妙味をもつものであるかを知つたのである。

先生は、「未刊國文古註釋大系」の内容見本に次のやうな御言葉を寄せてゐられる。

「古文學研究の第一事が其の原典の遺憾なき解釋に在ることは言ふまでもない。我が國過去の國文學研究が註釋學に集中されてゐたのは當然の事であつて、現在はた將來と雖も亦然るべき筈である。註釋の事起つて數百年、古註新釋浸く築き上げ來つた先哲の偉大な業蹟に向つて、吾人は常に景仰措く能はざると共に、其の雄著力作にして偶々上木の運に洩れた爲可惜埋沒して世に知られざるもの、知られながら容易く閲得る便を缺くもの等に對する憾は亦尠くなかつた。然るに今回それら未刊行の國文學註釋書が、斯界の權威文學博士吉澤義則先生の手づからの編輯に由つて、大系的に上版されるに至つたことは、斯道の爲洵に慶賀に堪へない所である。其の書目を看るに、天下の幽笈秘庫に亘つて稀籌珍書を爬羅し盡したものであり、殊に其の範圍の廣汎なること、眞に國文學界未曾有の偉觀といふべく、蓋し滿天下學徒の齊しく翹望する所であらう。而して斯る一大編著の出版を引受けた帝國教育會出版部の義心をも亦多としなくてはならない。吾人は本大系の世に出づるに臨んで、滿腔の敬意を披瀝すると共に、弘く江湖に向つて此の書を推薦する所以である。」

以上は、先生の御文章の散佚を防げ目的のために、殊更に選んで、その全文を掲げたのであるが、こゝにも注釋を尊重される先生の御精神は明瞭に現れてゐる。

先生は、註釋が學問上重要であることを御認識になり、而して、註釋に巧みでゐられるのみならず、又、深く註釋を樂しんでゐられるやうに拜する。先生は、註釋書であればその大小詳略を問はずお集めになつてをり、註釋のために作られた近世の諸辯書なども零細なものまで集めてゐられる。これは、註釋が先生の御趣味ともなつてゐることを語るものであらう。

さて、このやうな先生の註釋御尊重は何に本づくのであらうか。蓋し、先生の御内なる實證的御精神及び藝術味解の御力に由來するものと拜察される。この兩者は實に先生の全御學風の特質を決定してゐる根本的な要素である。

註釋尊重の事は、私が先生に仰いでゐる尊い御教訓の一つである。

思ひ出

加藤卓一

學校を出てからもう六年をすごした。最近女學校から中學校に移つたと云ふ出來事以外には平々凡々に暮して來ただけに、今までの六年間がまるで一年か二年位にしか顧られない事もあるし、又十年も二十年もたつたやうに回想されることもある。そして健忘症の私は在學中の事は大方忘れかけて仕舞つた。然し具體的な一つ一つの事がらは忘れても、樂しかつた愉快だつたと云ふ氣分の記憶だけは宇治のいゝ玉露を呑んだ後味のやうに口の奥でほのかに香つて居る。

春日先生の御宅を最初訪問したのは二年の何時頃であつたか之もはつきりしないが元の御住居に馬場君と二人で出掛けた。御口數の少ない先生と世馴れぬ學生とで初めは話がとぎれ勝でとても二人は固くなつて坐つて居たが、段々先生の溫い人なつこい笑顔と、ぽつ〳〵お話しになる御言葉にくつろいで來て煙草に火をつけたりした。それでも御門を出た時はほつとした氣持であつたやうに覺える。

其の頃二人は國文會の幹事であつた關係で、其後もちよいちよい先生の御宅に上る機會があつたが馴るれば馴れる程居心地が樂になり、話が面白くなるのは「雲出鳥還處」だつた。

私共が當番の時、卒業生の送別會を例の通り行つたが、國文會としては初めての所謂宴會であつた。興到つて唄ふ者、踊る者、吟ずる者、舞ふ者で宴まさに酣なる時、思ひがけない、本當に意想外の謹嚴な春日先生が私と手をとりあつて踊つて下さつた。皆は感々興に乘つて歡の限りを盡した。先生も若い者の氣持をくんで下さつて、つとめて立上つて下さつた事を思ふと涙がこぼれさうに嬉しかつた、私は泣きたい樣な笑ひたい樣な氣持で囁ぎ廻つたあの氣持は一生忘れることはないであらう。

もう一つ私が鹿兒島に來て二三年目先生は卒業生の就職の件でこちらにお見えになつた事があつた。珍しく鹿兒島にも雪がちらつく寒い日であつたが、先生は暇をはかつて桂庵禪師の墓にお詣りなさつた。波多江君と私とはお伴をして先生の石摺の御手傳をしたり教へて貰つたりした。任地で先生に逢ふのは何だか肩身がひろく、心強く、懷しいものである。そしてなまけ勝な私は先生のお顔を見たゞけで叱られた樣な氣がする。篤學な先生の面持に接するとこれではいかぬと反省させられる。然しお別れするといつとなく忘れて仕舞ふので、今度は先生の御寫眞と書をお貰ひしていつも書齋に飾つておいて自省の鏡としたいと思つて居る。そ

の内に論文を書いて先生にお願ひしたら御面倒ではあらうが先生は屹度よろこんで見て下さるだらうと意氣込んで居る次第である。

懷かしい親しい父親に對する樣な氣持を持ちながら、それが玉露の香氣の樣につかんで見せることが出來ないだけに、はがいゝ程筆が廻らないで殘念である。

感恩錄

笹淵友一

私が初めて先生の聲咳に接してから殆んど十年に近い。その間七年、大學在學中の三年間に更に引續いて卒業後の四年間もやはり福岡にあつて常に先生に親炙することを得た。この點に於ては卒業と同時に他の地方に赴任して行つた人々に比べて幸福な一人であつたと思つてゐる。

先生の御學識について讃辭を申上げることなど、たとひそれが僞のない眞情であるにても、僭越の至りであると思ふから控へたい。ただ私事に亘ることながら、私の今日に至る研究の領域を決定したものは、大學入學後最初に聽講した先生の御講義「平安朝文學史」であつた。私はその御講義に示唆せられて、平安朝和歌つづいて物語文學への興味を深め、自己の研究領域として選擇することにもなつたのである。更に私の先生から受けた學恩は教室に於ける場合丈ではなかつた。屢々愚問を提げては御宅にお訪ねして先生の貴重な御時間をつぶし、或はあちこちの圖書館の藏書を借出していただいたりした。のみならず、つまらない原稿の發表にまで御心を配つて下さつたこともある。

併し私共が先生に心から頭を垂れさせられるのは、先生の御學識もさることながら、その御立派な人格である。我等如きが先生の御人格を云々するのは群盲象を撫づるの類にちがひないが、先生の慈父の如き御溫容は、先生に接する者の誰しも第一印象として受取るところであらう。而もその御溫容の裡には嚴として犯すべからざる古武士の如きものがある。それは先生の御人格のあらはれであらう。從つて先生は何もかもぶちまけてお縋り出來る方であると共に怖い方でもある。先生の穏かな微笑の中には「君はまだそんなところに迷してゐるのか」と窘められるやうなものが感ぜられて、正直のところ私は怖いのである。先生の批評など恐れ入つた次第であるが、私は在學中友人某氏と、何かの折に「先生は矢張信州の方だ。島木赤彦氏などから受ける印象とどこかに共通したものがある」と語り合つたことを覺えてゐる。先生は

こんな童蒙の盲批評を穏かな微笑の中にお許し下さるであらう。

私は卒業後今日に至るまで一身上のことで先生に御面倒をおかけしたことは限りはないが、それに福岡在住時代の住居はいつも先生の御宅に近かつたので私のみならず妻までが先生や奥様の御世話に預ることが多かつた。蹴鞠山在住當時、一日奥様御心盡しの御重を先生御自身おもち下さつたことや、引越といつては奥様が加勢にお出で下さつたことなど、今憶ひ出しても勿體ない氣がする。今でも辱い追憶の一つとして、大切な寶石を筥の中から取出すやうに、折々妻と語り合ふことである。

先般先生からいただいた御手紙の中に次のやうな御教訓があつた。

一、餘りあせらずに氣長になさる方がよいと思ひます

一、身體の健康を第一になさるやう祈ります

一、緩歩久しきに堪ふることを望みます

これは、學遲々として進まず、加ふるに人生行路の難きを感じて歎じた私への御返事の一節である。毅然たる態度を以て悠々迫ることなく今日まで世を生き給うた先生としては、肚は出來てゐず、常に腰がふら〳〵してゐる私の足どりを危つかしくお感じになつたのであらう。私はこの御言葉を拜誦した刹那、心頭の熱火に冷水三斗を浴びせられる思がした。併し次の瞬間しみじみと心に徹るものは先生の御恩情であつた。私はこの御教訓をいただいた時からこれを座右の銘として、いくらのろくとも自分は自分の足に相應しい歩幅でたゆみなく歩いてゆかうと決心してゐる。

小島先生は愈々御健在であり、筐月兄亦常に國文學界に堂々の論陣を張つて名刀の切味の如き冴えを示して居られるのを拜見すると九大國文科の將來は益々洋々たるものがあらう。併し私共の國文科に對する追憶から春日小島兩先生は切つても切離すことが出來ない。その兩先生の御一人が既に講壇から去つて居られることを想像すれば寂しさの極みである。併し先生は御還暦を迎へられて御健康も益々御すこやかに、今後は一層御研究に沒頭せらるゝ由に伺つてゐる。それは私共にとつて大きな喜びである。私は先生が講壇を去られても、又還暦の御齢に達せられてもいつまでも該博なる學殖と高邁なる御人格とによつて我々門弟子を指導していただくやうお願ひしたい。そしてそれと同時に我々も亦及ばずながら我等の最善を盡して報恩の萬分の一としたいと思ふ。それは教育者としての春日先生の御功績を實證すべく我等門弟子に課せられた義務であると信ずる。

職務の都合上、どうしても御還暦祝賀の式に參列することを得ず、かねての御高恩をおもつて申譯なく存じてゐる。はるかに先生の御健康を祈つて、素懷の一端をしるす次第である。(五月廿八日)

春日先生への書簡

瀬古　確

朝晩は大分ひんやりと致すやうになりましたが先生にはお變りはありませんか。お伺ひ申上げます。私もお蔭で無事毎日學校へ出ては、暇には少しづつ調べ物を續けてゐます。先生には今春めでたく還暦を迎へられると共に大學の教壇をお去りになられたとか、何となしに淋しい氣持がいたします。今後とても九大國文學會をはじめ廣く國語國文學界のために御自愛專一になされるやうにおねがひいたします。

時々福岡の學生時代の事を思ひ出しては懷しんでゐます。先生のお宅へ初めてお邪魔いたしましたのは九大へ入學した昭和四年の冬の頃だつたと思ひます。まだ下警固のお宅にゐらつしやつた時分で卒業論文としての「大伴家持」を研究するについて種々御注意を承つたのでした。

それからは何度もお邪魔をいたしては萬葉集名所類聚とか假名沿革資料とかをお借りしては下宿の二階で寫木をした事もあります。

卒業間際には就職のためいろいろお世話になりましたが、特に俊猷館中學から學校へ申込があつたとかで、私を御紹介下さつた時には、先生はわざわざ道の悪い中を下宿までお訪ね下さいました。

私は三年間同じ下宿に通してゐましたが、その家の動くのと共に一、二度轉宅いたしました。先生のお訪ね下さつた時分は下宿のお爺さんが知人の債務を保證してゐたため、知人が支拂不能になると共に、それを自ら辨償しなければならなくなり、貸家も四五軒は持つてゐましたがそれも人手に渡さねばならない程でした。從つて今まで住んでゐた二階建の家を引拂つて、間數も少い小さな家に住むやうになりました。私にも氣の毒だから他へ替つてくれとの話もありましたが、卒業間近でもあり、お爺さんにもお氣の毒でしたので、その儘その家の一間を借受けてゐました。其處の宛名が住吉櫻町でしたので先生は住吉神社前から下車なさつたとか十町以上の遠い所を歩いてお訪ね下さつたのには今でも恐縮に存じてゐます。

卒業後は一度お目に掛つたばかりで御無沙汰いたしてゐます。昭和七年の夏の頃でした。歸省の途中お訪ねいたしました所、御旅行の御豫定を差繰つてお待ちをいたゞき種々有益なお話を伺ふ事の出來ましたのは感謝に堪へません。

それから一昨年の秋三ケ月間内地留學を命ぜられ歸國いたしま

した時分には、一度東京まで急いで行かねばなりませんでしたので、東京から引返して自宅を訪ねたり、大阪の恩師の許へお邪魔したり、廣島の親戚へ立寄つたりして、それから先生をお訪ねしたのでしたが、お手紙も差上げずに出向きましたので、生憎御旅行中でお目にかゝれませんでした。丁度奥樣も御不在でしたし、小島先生にも一足違ひでお目にかゝれませんでしたので、奈良への御旅行中だつた事も後ではじめてわかりました。

あれからはまだ内地へ歸りません。此の次お目にかゝれる機會を樂しみに致してゐます。

私も卒業後「大伴家持の研究」「近代日本文章史」の二書を出しましたが、それにつゞいて「上代文學の背景」を終へ、只今「日本文學理念の展開」を執筆中です。

今後も何かと御指導を仰がねばならぬ事と思ひますが、相變らずよろしくおねがひいたします。

向寒の砌り切角御自愛の程をお祈りいたします。末筆ながら奥樣にもよろしくお傳へ下されば幸甚と存じます。

（昭和一三・一〇・九）

春日先生御還暦記念號に寄する

藤井　毅

春日先生御還暦記念祝賀式が、今般九州帝國大學に於て行はせられるに當り、私も親しく先生にお目にかゝりて御祝詞を申上げたく、其の盛大な御式に參列するの榮を得た一人であることを嬉しく思ふ者である。

其の喜び、その感激は拙き筆の及ばざるところ、今殊更茲に書記する迄もないところである。

先生が愈々御健康をお保ちになられて、斯界のために一層の御貢獻を遊ばされますことを私は切望申上げてやまないのである。

春日先生の記念式、御藏書展、記念の御講義、記念祝宴に纏いての國文學會の總會も亦或る意味に於て數多の感激を齎すものゝ一つであり、久方振りに先生を中心として先輩と後より來る人々との交驩のなごやかなる會の雰圍氣に浸り得たるの樂しみも亦快なるものあるを覺えた。私と期を同じくし若くは期を前後近うす

る卒業生諸氏の來會せられる方々の少かりしは尤なるものありしとはいへ、微か物足らざるの思をあらしめた。九大の國文學會は今や又昔日の明朗、和やかな會に還元せられたのである。冀はくば此後一層の愛着と關心とを持たれて先輩諸氏の一人でも多くが來會せられんことを希ふ次第である。

私は歸名後鄉士に於ける石田元季先生の御還曆出版記念式を控へ、これも幸に滯りなく豫期以上の盛會に完濟させて、今日しも靜かに思ふとき、先週には春日先生、今週は石田先生と相續けての恩師の御還曆にあつて轉々感慨に堪へざるものがある。

兩先生ともに四十年に亘るの御研鑽の上に、猶矍鑠として、昨日も今日も亦明日も同じ道を同じく歩まんと御いそしみになられるのを見奉りては、若年たる私、豈勉勵せざるべけんやと強く思ふのである。

むさしの、記

海老原美武

謝恩の讌げ

おせわばかりおかけした春日、小島兩先生へ心ばかりの謝恩のおしるしに秋も深い一夕、博多の一禪寺で普茶の雅讌を催した。おとなしい親切な山田猛さんがわざ〳〵頼みにいつて下さつた。夕べ近く山門を入つて右手の玄關に案内をこふと、もうおみえになつていらつしやつた兩先生や白木さん、猛さんが、書院から案内の坊さんの代りに、「サアどうぞ」とにぎやかに仰言つて下さつた。

やがて坊さんがでてきて、「こちらへ」と導かれるまゝに指月庵と扁額のかけられてある茶室へ招じられる。快い濡縁近く薄がさやかに風にふかれて虫のねがきこえてゐる。ほのかにたきこめられた房中の香の薫り。すゝめられたお茶と前餅を頂きながら、この薄に中秋の月が流れたならどんなにいゝだらうと思つてゐた。

そのうち再び書院に招じられた。眞中に珍しい料理が運ばれる。これを銘々とりわけるのである。中々結構である。いろ〳〵床しい料理がでてきたが、終り頃ゆりをそのまゝにたものなどもり合せてもたらされた頃には、兩先生始め皆「なか〳〵滿腹するものですなあ」とお腹を抱へてゐた。初めの頃、ご飯はでないのだらうかといふみんなの心配があつて庫裡に催促にいつたことなど今は朗かな笑ひの種となつてゐた。いよ〳〵滿腹の頃に、そのご飯がつや〳〵と黄金の新栗を白いまゝのお米にたきこんで運ばれてきた。それ以來いつもなつかしさを忘れえない讌の字が、春日先

生のあの雅味あふれた筆で、住職がもつてこられた記念帖に「昭和――中秋――ニ讃ス云々」と潤された頃には、もうすつかり昏れた庭前の闇に、禊どしの明るい灯をうけてりはえてゐた柿の枝が、これも今宵の料理の一品です、と手折られて卓の上に綠と赤の色をそへた。このさゝやかなうたげを春日先生も小島先生も心からお悦び下さつた。滋味あふれる會が終つて、兩先生は「これはお土產に頂いてゆかう」と柿の枝をさげてお歸りになつた。忘れえない懷しい思出である。

東京へ歸つてから普茶料理はないかと探してみた。墨堤の弘福寺と、昔からうわさにきいてゐた雲水といふのがあつた。雲水で母の法事をしたことがあつた。初夏の川風も屋に快い言問橋を渡つて、言問團子の前を通つてゆくと、やがて左の柄込の中に風雨に曝された「雲水」の高札がスツクとたつてゐた。

席に通ると朱塗りの卓が並べてあつて、まもなくお菓子と抹茶が運ばれた。次々とだされる精進料理、中々結構で忽ちおなか一杯になつて、誰も後は折詰にしてもらつて歸つた。その軒には木鐸がつられ、席には大木魚がおかれてゐる。それをポク〳〵とうつと、向ふで「ハーイ」とすんだ返事が聞えて、頭の綺麗に青い可愛いお小僧さんが腰衣をつけ、辮のつゝ袖で活潑にでてくるのである。誰かゞ「お酌してくれますか」と尋ねたら「お酌は致しませんッ！」とニコ〳〵しながら無邪氣に元氣のいゝ聲で斷られた。勘定書の受取が又面白くて、おゝ牌をすつた紙なのである。

この言問の邊りには有名な櫻餅が今も尙殘つてゐる。阿部正弘以來子規に至るお豐の櫻餅である。それから根岸の豆腐料理笹の雪、啄木會の催される團子坂の菊そばなど今も江戸の香をとゞめてゐる。

普茶で始つたこの思出は、また精進で終らうとしてゐる。それは「眉引の多麻の横山」が玉の淸流に臨むところ、高幡山金剛寺で、同寺の鰐口神牌が重要美術品に定められたことゝ多麻史談會の五周年記念の催しが六月五日から笹川臨風氏始め十二氏のお話で夕方迄行はれ、午は手打そば、夜は心づくしの精進料理のかず〳〵で快く祝はれようといふしらせが嬉しくもたらされたことである。夕べの宴にはあの「多麻河泊爾左良須氏豆久利佐良左良爾奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎」の布晒しのふくさが記念に頒たれるといふ樂しさを心に抱きながらこの懷しい思出をとぢようと思ふ。

牡丹の寺

短冊よりも細長い賀紙に朱く井桁の枠をつけ、同じ朱字で「萬昌院の牡丹……世話人某印施と印した紙がある朝入つてゐた。む

さしのゝ朝霧がしつとりとこめてゐる初夏の青葉に映りながら、床をでて涼しさの中をそのお寺のある落合へ歩いていつた。流れをめぐらした丘の上には躑躅のさきこぼれる寺々が並んでみえる。丘を登つたところに小松の村立があつて、良寛さま流の見事な墨色が白い綾の流れてゐる雅びかな紙にさはやかに潤うて、青竹も涼しい高札にはられ、青松の針の表に泛んでゐる。「縱覽隨意」の脫俗の筆。その小松の奥に立派な山門が和尚さんの青の標札も清々しいあの流れる筆の跡でかゝれてたつてゐた。

門の中をみると、もう一杯さき誇つてゐる牡丹の花が露のうちにもり上つてゐる。廣いお庭で、草山の緣に山吹の黄もめざめるばかりの鐘樓もそびえてゐ、この花壇を前にめぐらした高みには籬のひまも素朴な庫裡が一棟離れてみえる。その庭さきからの入口の二柱に大きな擂鉢を倒さまに被せたのもおもしろい。今を盛りとえみこぼれる富貴な花、一株々々めでながら庭外れの方へくると、檜はだの香はしい一屋がたつてゐて、お茶の待合のやうなしつらへの片隅にお花、お線香がおかれ、手燭に燐寸がそへてあつた。木の壁に、お代金はこの竹筒へいれて下さい。くゆらす時は燐寸から手燭へ火をうつしてお線香につけて下さいと、あの筆であの紙にかゝれてはつてあつた。

曹洞宗のこのお寺は德川時代から大きなものであつたであらう、

殷ケ岳七本鎗の末裔屋一政、水野十郎左衛門、初代歌川豐國、吉良上野、上野と同役の品川豐前守、上野の傷を治療した名醫、栗崎道有の墓碣や大岡越前守の供養塔などがある。僕が小さい頃よく父が話してゐたが、上野の墓は始終人に倒されてしまふといつてゐたことなど思ひだしながら一めぐり詣でて、また牡丹の苑に戻つてくると、漸くはれてゆく朝霧の中の休み臺に、色もうれしい緋毛氈をのべてゐる女の人の姿がみえてきた。

朝顔の竹

初夏のある朝、新聞をひらいてみると、藤村さんが長くすまれた飯倉片町のあの崖底の家を近くひきはらつて、始めて新築の家にうつられることがのせられてゐた。僕は一つ谷底の家をみようと思つてでかけた。なる程穴倉の中へ入つてゆくやうである。片町の電車通からえらい傾斜の坂をおりて、すぐ右へ石段を下つてゆく。突當りの右のトタン塀に、あの朝顔の添竹が立つてゐる。いよ〳〵とつゝきの家へきて、ふと左の窓の格子にかけられた簾どしに中をみたら、長い間寫眞でみてゐたあの顔が、いかにも藤村さんらしい格好をしたあのずーつとした姿で半ばこちらをむいて坐つてゐた。

玄關のところで名札をみてゐたら、藤村さんがでてこられた。

客がきたと思はれたのであらう。そして「どなたですか」といはれた。僕は一寸弱つたが「近くお引越になると新聞で拜見致しましたので、一寸お家をみておきたくて參つたものです。」といつた。そのうち、一つ藤村さんもいれてこの家を撮つておかうかと思つて「お家をとらせて頂きたいと思ひますが、どうでございますか一つご一緒に……」と笑つたら「ハ、さうですか。」と下駄箱から下駄をだして、格子をあけ出てこられる。そして蒲團のほしてある二階の方をみあげて横をみせながら「却つてこんなのがいゝでせう」と例の調子でいはれた。「もう一つ……」といへば今度は後向きになられる。そして「君はどういふ方ですか」と訊ねられた。このじめ〳〵した崖下に年ごろ變りなく住まれたこの小さな家を僕は改めて眺めて辭したのであつた。

壽詞

瀨良益夫

還暦の賀とは何であらうか。

還暦とは「暦の上の六十支干を一周して初に還りたる義」であるといふ。かくして「初に還つたこと」を記念するのが還暦の賀でなくてはならない。初に還ることを賀する行爲の中には、その人の歩める長き生涯と歴史とを回顧する精神があるであらう。

恩師還暦の賀とは年若き弟子達にとつて如何なる意味であらうか。

もとよりそこには恩師が老年益々多幸にましますを祝し奉る精神がある。然し只師の長生と健康とを喜びまつる事のみが還暦の賀の意味であらうか。「初にかへること」を記念する本來の精神に於いて、そこに恩師の「生涯と歴史」いはゞ恩師の道をかへり見ることが重要な意味を持つのではなからうか。

今嚴肅にして而も喜びに滿てる恩師還歴祝賀の會が開かれると聞く。吾々年若き弟子達は恩師六十年の生涯の中に果して如何なる道と精神とをよみとらうとするのであるか。師の謙虚にして而も厳しきあの精神を攝取することによつて、如何なる決意をなさんとするのであるか。

恩師還暦の賀宴に當り、國文學會と共に自らも遥かに恭しく壽詞奉り恩師の益々御加餐齡を重ねたまはんことを祈り奉る。

（十三・五・廿六）

思ふこゝども

横山　正

先日の祝賀會の席上、あらゆる方々に依つて春日先生の學問上、の御貢獻並に御人格についての讃辭が呈せられた。それは先生の私的生活の裏面にまで及んでゐたやうであつた。私どもの門弟の末席をけがす者が、今更これと同樣な言葉を述べるまでもないであらう。

私は入學當初、先生を何んだか恐ろしい方と感じてゐた。然し、その恐怖感が間違ひであることは其後次第にわかつて來たが、未だ先生の御人格を直接、身に感じたことはなかつた。然るに、私は卒業論文提出直前に流感に犯されて、卒業さへも危く思はれた事件以來、鈍才の私には、初めて先生の御人格に觸れ得たのであつた。表面學生に對して殆んど無關心かの如く見えてゐて而も、これほどまでに一學生に對しても御配慮下さつてゐるかと思ふと、病床を感謝の涙でぬらすことも幾度かであつた。然し斯かる事に對する如何なる最上級の讃辭も、學者たる先生を決してお喜ばせすることは出來ないであらう。學者たる先生に對して門下生たるわれ〳〵の報恩の途は學問を離れては存在しない。けれども私どもの者に學問上の報恩など思ひもよらない事である。が假令片々たる一論文でも百萬言の讃辭よりは先生に報いることと大なるを思ふ時、自ら努力せざるを得ない。私も門下生の末席をけがしてゐるからには、單なる一時の讃辭よりも、むしろ出來れば門下生らしい報恩の途をたどりたいと思つてゐる。

夏日憶恩師

岩崎宗次郎

蠅がうるさく私の頭のまわりを飛び廻つてゐる。もうすつかり夏になつてしまつた。机に向つてぢつと本を讀んでゐる私の腋の下から、背中から、いや首筋からねつとりとした汗がにじみ出て來た。頭を上げると、窓の下に見える向ひの花畑のダリヤが、天鵞絨、黄、赤と色とりどりに咲き亂れてゐる。少し疲れを訴へて來た眼にとつて、それは又何と清新な綺麗さを感覺せしめたことだらう。暫くの間私は身も心も全くダリヤの花園の中に漂つてゐた。

「もう半年餘りで卒業か」

ふと思ふともなしにその時私はかう思つた。

さうだ、卒業までに約半歳しか殘つてゐない。さすれば、私が九大に入學して既に二年有餘の月日を閲してゐることになる。此の二年餘りを靜かにふりかへつてみる時、私は唯夢のやうにその日その日を送り打過して來たといふ事以外には、何ら印象にとまるべき事とてはなしてゐない事にやうやく氣付いて、自ら愧ぢざるを得なかつた。怠けられるだけ怠けて來た自分の無氣力さが後世に對する悔を殘すものだといふ事が、今になつて始めて判つたやうな氣がする。かう考へるにつけても、私はつくづく、「どうして私は春日先生を見習はなかつたのだらうか」と後悔の念に驅られるのだつた。恩師に愧ぢざるどころか、穴があつたら入りたい位に私は恥ぢいるのである。

以下此の二年間私が見て來た春日先生に對する追憶を辿つてみようと思ふ。然し元來記憶力の薄い私のことではあり、又餘りにも不注意な私であつたので、たゞ漠然と頭に浮かぶまゝに書き下して行かうと思ふ。

「すると君は全く博多の人だね」

春日先生はにこにこと溫顏に一杯の笑みを湛へて、靜かに、私をぢつと見まもるやうにしておつしやつた。その時の御樣子つたら全く慈父そのものだつた。何とも形容の出來ない親しみが私の頭からすうつと足の先まで傳つて行つた。溫い家族的な國文學會內の空氣が、かくして既に此の時私の身にしみ始めたのだつた。之は生田に於ける新入生歡迎會での自己紹介の際の事であつた。大學教授なんか情も何も知らぬ、唯こちこちの石部金吉流の人達許りだと思つて、幾らかおづおづとして入つて來た私だつたが、此の日から本當に先生達に對する認識の是正の必要を痛感せずにはゐられなくなり、同時に一種の親しみを感じて來たのであつた。然し演習に於ける先生の態度には、一種嚴たる氣位が備つてゐて、而も測り知れない學の深さには秘かに畏怖の念さへ懷かざるを得なかつた。「それは徒然草の中にあるよ」演習中に時々語句や服飾について、それは何かの本で見たことはないかと學生にお問ひになる事があつた。そんな時答へうる者は殆どなかつた。すると先生はいつもの如くにこにこの溫顏に、思ひなしか幾らかの淋しさを泛ませてかうおつしやるのだつた。そんな時私達は互に顏見合せて恥づかしさを隱さうとするのだつた。互にゆがんだ笑ひを交歡しさへすれば、それでどうにかその場の責任をのがれたやうに思つてゐたのだつた。然しそれが大間違であつたとは今まで氣が付かなかつたのである。何故あの時、何回となくおつしやつたその最終回の時にでも氣付いて、先生の意を諒解して、一

生懸命勉强しなかつたのであらうか。或は徒然草、或は土佐日記にあると指摘されつつも、やはりそのまゝに聞き流して行き、度々同じ事をくり返し注意され乍らも少しも改めようとしなかつた私らの愚しい態度、いや生意氣な横着な態度が今となつては限りなく恨めしい。

かうした想ひ出は數限りもなく、もつとうまい表現法で、他の人達によつて示されてゐるであらう。

忘れもしない今年二月二十一日の事だつた。此の日午前十時半から午後零時半まで、先生の枕草紙演習が第二演習室で行はれたのであつた。實に此の日こそ先生御在職中最後の演習だつたのである。

何ともいひやうのない位重々しい雰圍氣の中で、堺本枕草紙下卷「あるはことば」の條を靜かに御講了なさつた先生は、思ひなしか輕いためいきをなさつたやうだつた。それから幾秒か沈默が演習室を支配した。皆より先生の方を見得る者はなかつた。靜かに、名殘を惜しむかのやうに書物をお閉ぢになつたやうである。と、

「私が此の講讀を終つた途端に、此の本の背が、こんなに外れてしまひました」

感慨にふるふやうな、確かに力一杯ぢつと涙を瞼の邊の一歩手前に引留められてゐるに違ひない聲が、室中に悲痛な氣分を漲らせた。皆の眼は一樣に先生の右手に掲げられた鈴木弘恭氏著枕草紙註釋にそそがれた。先生の右手は僅にわなないてゐる。

「これは私が初めて枕草紙を學んだ時に求めたもので、もう二十年にもなる。隨分古いものですね」

と今度は明かに泣いていらつしやるやうだ。はつきりとは聞きとれない位だ。私も何時しか瞼の熱くなるのを感じた。先生の名講義も之が最後か、と思ふと矢も楯もたまらなくなり、とめどもなく涙が瞼の堰を切つて溢れ出ようとするのだつた。先生もきつとお淋しいに違ひない、感無量の底には言ふに言へない寂寞が流れてゐるものだ。皆名殘惜しさうに、こととと室を出られる先生に對して、ぢつと目禮しつつ、危ぶく「先生！」と叫び出しさうになるのを、辛うじて舌先で嚙み殺してゐるやうであつた。

四月一日朝刊で愈々先生のお辭めになつたことが確められた。あゝ到々先生はお辭めになつたのだ。それまではまだ本當ではない、何かしら再び敎壇に先生をお迎へ出來るやうな氣がしてゐたのだつた。ふつと淋しくなつて、それが急にわけのわからない憤

りへと膨脹し、はつと氣の付いた時には、朝刊からもぎとられた文部省辭令の部分が、手の中でくしやくしやになつてゐた。

去る四月末日の新入生歡迎會の席上であつた。今年も亦春日先生の歡迎の辭によつて始まつた。その淳淳たる口調は先生獨特の人情のこもつた、深く味得すべきそれであつた。中でも初めての歡迎會の歸途天神町の夜店でお求めになつた躑躅の、白花を咲き綻ばす時分になると、そろそろと新入生歡迎會をおしのびになるといふ話は、私達一同に深い感激を與へた。更に先生は語を繼いで、

『新聞社といふものは實に出鱈目なことばかり書いて困ります。先日も福日に、私は總長にあつさりと辭表を提出してしまつたなんて書いてあつたが、實の所私は、あつさりどころか未練たつぷりだつたのです。唯學校の內規で辭めねばならぬ爲め、辭めたに過ぎません。私は皆樣と離れることは出來ないと考へてゐるのですから」

とおつしやつた時には、私は本當に有難いと感じた。それでこそ先生だとも思つた。實は私自身三月末日頃の福日紙上で、「書齋の人」なる見出しの下に和服姿で机の前にお坐りになつてゐる先生のお寫眞入りで、そんな事が書いてあつたのを見て憤慨してゐた一人だつたのである。だから本當に嬉しくて嬉しくて、私は先生の御心持にどんなに感謝申し上げてよいやらわからない位であつた。先生はそんなにまでも私達のことを思つてゐて下さつたのだ。感激に充ちた眼を先生に向けると、先生もそれだけ言つて、思はずほつとされたらしい氣配が、私如き者にもはつきりと感ぜられたのであつた。先生は、春日先生は、我が九大國文學會の存する限り斷じて切り得ぬ關係にある御恩人であらねばならぬ。舵なき舟は進まぬ。先生こそは實に私達にとつて、いや九大國文學會にとつて無二の舵であらねばならない。私達が拙いながらも今日まで生長して來えたのも、偏に先生の高邁なる御人格と、適切なる御指導によるのである。嚴格な中に溫情を溢れる許りに封じこまれた先生に對する時、私は「お爺さん」とつい口から迸り出さうになるのを辛うじて我慢せねばならなかつた。そのくせ何處となく恐ろしい人のやうにも思はれて、とても長時間も一緒にぢつと對座してゐることは出來ないといふやうな氣もした。さうしてゐると次第に先生の懷の中へ吸收されて行つてしまふやうに感ぜられるのだつた。

あゝ、然し今や先生の御姿敎壇になし。唯國文學會の催の席上において僅に先生の昔に變らぬ落着いた、而も慈味溢れるばかりの御容姿に接しうるに過ぎない。

國文學といふが如き學問は、六十路過ぎて益々圓熟味を加へて來るものだ。而も先生の御元氣さを以てしたならば、更に五年や十年は敎壇にお立ちになることも出來るのだ。醫學の如く自らメスを執つて人命を取扱ふが如きは、實際視力體力の問題からしても六十越せば既に老境に入つたとして、靜かに隱退を乞ふ外はあるまいが、文學などといふものはそれとは全く立場を異にするものだ。かう考へる私にとつては、實際、學の停年制は、毒々しき限りの悪規定だと思はれてならない。而も最近益々此の感を深くするのである。かう思ひ來れば際限もない。

たゞ先生の名調子が無上に懷しまれるだけだ。出來ることならば講師としてでもよい、先生の御講義がも一度耳の中に快音を齎して下さる事があつたら、何とうれしく思ふことだらう。

夏日やうやく暮れなんとし、遠く灣に浮かぶ島々の淡紫色の島影が、金色に輝く波頭に、ゆらゆらと搖れながら、次第に濃紫色へとうつつて行く。

（六・二八）

春日先生といふ人

内海　孝

今度僕達は先生を敎壇から失つた。之は何といつても淋しいことだ。悲しいことだ。しかし僕たちは先生とはつきりお別れしたわけでない。先生は今なほ僕達の側でぴんぴんしてゐられる。のみならず、鎖を放たれ給うた先生は今までより一層潑剌と自由自在に天空を飛翔してゐられる。徒らなる嘆きはやめよ、僕達は先生を祝福しようではないか。以下駄辯るは惜別の譜ではない。春日先生とはどんな人かと他人から聞かれた場合に、こんな人やと答へるメモの一端である。

俗な云ひ方であるが誰でも皆先生の採點振りを甘いといつてゐる。しかし之は決して先生があまいのではなく、さう云ふ彼等が聰明なせいであらう。その證據に阿呆な僕は、今度こそはと頑張るんだがほんの一度を除く外いつでも、僕の仲間が皆優を貰つてゐる時すら、僕だけは良である。嘘と思ふなら見せてあげてもいゝ。もし先生がほんとに甘いなら、いつでも僕は優を確信して出すんだから、僕のもたしかに優であるべき筈だ。先生が僕だけに限つて特にからいといふ筈はないからである。僕は中學とか前の

學校のころ、ろくでもない點をつけられると、何ぢやい、ぼけ作のくせに點だけは一人前につけやがつて、と腹をたてたものである。しかし先生の場合はこんな氣持はみぢんも起らない。といふのは第一に僕は、深遠かつ重厚な、底光りのする先生の學問には、とても齒がたゝないことをよく納得してゐるからである。第二に僕は、先生の文字通り圓滿なる人格に心から敬服してゐるからである。ともあれ、かく阿呆で頓馬でその上ぐうたらな不遜の弟子である僕には、學問的に先生をとやかくいふ能力もなければ資格もない。もし僕が先生を學問的に理解したとすれば、今云つたやうに「とても齒がたゝん」といふ位にとゞまる。だからこの方は眞摯なる國文學徒にでも聞いてくれ。あまりにも動物的であり市井的凡俗である僕は、學者でない、人間春日先生をかみしめてる方が肌にあつてゐるし、また僕は、文學博士春日先生よりも人間春日先生により親愛と崇敬の念を抱いてゐる。というて僕は、家庭に於ける先生も知らなければ、個人的に特に親しく人間春日先生に接したわけでなく、たゞ學校で學者春日先生の隙々に輝く人間春日先生を垣間見に覗いたに過ぎない。しかし春日先生は「先生」といふ文字をそれほど堅苦しく考へてゐられなかつたと思ふ。が、さう考へられてをつたとしても學生である僕達は學校に於ける人間春日先生を判斷すれば足りるので、家庭に於ける先生がよし暴君であつたとしても更に意を介する要はない。僕にとつては先生は大きな魅力だ。先生として頭を垂れる前に僕達はその體臭にうつとりとなつてしまふ。何といふ溫さであらう。もちろん、いくら人間慾とか圭角の多いものでも年が寄れば次第に磨滅するといへばそれまでだが、先生はそれだけではないやうだ。又世の所謂人格者といふものは聖人的いやみが鼻につき、といつ僞善者ぢやないか、と首をひねらせるものだが、先生にはそんな所はちつともない。全く天しんらんまんだ。先生の人柄を一口にいへば澁く溫く軟く圓い。僕達は丁度冬の日壁にもたれて日向ぼつこでもするに何の警戒もなく何の不安もなく先生の人柄に陶醉し得る。先生は僕達と共にゐ、僕達の心をその心としてをられる。ほんとに愛情に富んだ、もの分りのいゝ親父といふ感じがするな。だいいち先生の容貌風采から見てもそんな印象を受ける。澁味のある品のいゝ溫顏、全く可愛いゝといつた感じの小柄な幾分太り氣味の身體の老紳士だ。とにかく先生の溫い人格、謙讓な寬大な精神は、僕のみでない、誰でもひとしくその前に拜跪してゐるのだ。たとへば、といふのならいくらでも例を示し得るが、てつとり早く先生に會つてみたまへ、その方がよく合點が行くだらう。ところで先生は單なる溫厚の長者ではない。單に圓滿なる大人(うし)といふだけではない。先づ先生には情熱がある。信州人であ

る先生は信州人の情熱をもつてゐられる。素朴であるがしんねりむつつりとしぶとい情熱がある。倦まず撓まず一歩一歩と足どりもしつかりと六十年の間先生を歩ませた恐るべき學問的情熱はそれを證してあまりがあるだらう。しかしそれよりも僕を隨喜させるのは、先生のこの地味な情熱が、時々微笑しくも輕やかな詩人的一面を綻ばせることである。君に一度聞かせてやりたいよ、先生の源氏物語朗讀とか椰子の實一つの朗吟をな。全く我流で節まはしも朴訥なんだが、とてもうまい。それに何と云つても聲がいゝ。その人柄の如く澁く溫く軟く圓い聲で氣取らずてれ臭さうに泌々と語感を味つてゐるやうにほろほろと朗誦せられる。僕はその時の先生の顏が一番好きだな。僕が源氏を聽構したのはもちろん單位を稼ぐためもあつたが他面先生の朗讀を聞くのが樂しかつたためだし、宴會のあるたびに僕はよく椰子の實一つをおねだりしたものだ。又先生のこの詩人的情熱は先生をして時折り、巧まぬ、ほからかな、明るい、無邪氣なユーモアを發せしめる。だいたい洒落つ氣のないやうな人間は僕は好かんが先生はなかなか洒脫だ。文句は忘れたが能古とかいふ歌の雜誌に、街へ出て風呂敷で何とかいふ、王仁三郎式の面白い歌を作つて居られたし、この間展覽された先生の藏書の一冊に、割箸の滑稽な都々逸がはさんであつた。文句が知りたければ先生の藏書を一つ一つ檢べてみたまへ、たしかにある筈である。ともあれ、先生の演習が面白く、先生の人柄がはる日のやうに駘蕩とし、今なほ先生の氣持が青年のやうに若々しいのは、この香しい詩人的情熱のせいだと思ふな。さて、かう云つて來ると先生は穏やかが取り柄のふにやふにやな人間に聞えるかも知れんが、どうしてどうして、なまこ的存在ではないのである。先生には逞しい覇氣がある。その慈顏に大きく眞一文字に結んだ部厚な唇が强固な意志を物語るが、何よりも先づ先生の歩き振りを見たまへ。僕はかつて先生が電車から下りられて學校へ行かれる後から先生に追付かうとしていくら足を早めてもたうとう先生に追ひつけなかつたことがあるが、かく速度が早いばかりでなく實にてきぱきと力强い歩きかただ。それはまさしく突進といつた形で、短軀で溫厚な老先生にどうしてあれほどピストンのやうに凄じく、砂塵を蹴たてる程勇しく活潑に歩けるのかと不思議に思ふ位であるが、之は不思議でも何でもなく又、ひどころから先生が誇られる健脚のせいばかりでもないのであつて、先生の覇氣の逞しさ、信念の强固さが先生を驅立てるのである。で、寛大で謙遜な先生は莞爾としながら他人の云ふことに耳を傾けられる、しかし自說は頑としてまげないしぶとさ、そして、一旦かうと目標を信じたら飽までそれに到達する不屈の鬪志が先生の體内深く根强く蟠つてゐることを見逃すべきでない。決

して目だたないが、これはなんでもない事にも時たま顔を覗かせる。つまり先生は強靱な意志力、太々しい鼻っ柱の上に幾重にも溫い「德」の衣を着てゐられるわけさ。

今云つたことは、春日先生のほんの素描に過ぎない。もつと精しいことが知りたかつたら遠慮なく僕の所へ來てくれ給へ。春日先生のことなら僕は何時でも喜んで氣持よく話してあげる。

春日先生を送る

益永貶隆

教を蒙ること二ケ年、先生は停年の故をもつて御身退になつた。二年間のそのあひだ、先生の教へ子としてわたしはあまり好い子でなかつたことが恥かしい。うまれつき内氣でしかも傲岸なわたくしは人の偉大さを肯定するのに吝である。それにも拘らず、先生には理窟なしに頭がさがる。先生の學の深さたしかさ、先生の御人格、そのまへには己の片意地もくづをれてゆくのを覺える。

教場の先生に對してはかるい畏怖を感じてゐた。何故ならわたしはあまり勉强しなかつたから。然し國文學の學會や宴會等の席上の先生を見るのはたのしみだつた。何故なら先生はつねに溫顔に微笑を湛えてゐられたから。先生の學園を去られてより一沫の寂しさを感じはすれど、先生の溫容に接するの日はまだ多からむと思ひて、自ら心を慰めてゐる。

お別れのことば

矢野文博

此度先生が御還暦を迎へられたことに對しましては、出來るだけの御喜の御言葉を申上げたいと思ひますが、同時に大學を御退きになられたことに就きましては、私共在學の者にとつて諦め切れないことで、誠に哀惜の念に堪へません。先生は非常に御元氣で、先日四天寺山方面のピクニックに際しても、いつも御先頭で私共若い者でさへ、ともすれば遅れ勝でした。そんな御元氣な御姿も、最早教場では見られなくなりました。王朝の夢の世界に誘ひ入れる樣な、あの源氏の朗讀も、先生の御人柄をその儘あらはして、如何にも圓滿な、謹直な、そして愛情に躍動してゐる樣な、あの黑板の字の一劃々々も、すべては懷しい思ひ出となつて終ひました。せめてもう一年居られたらと今更乍ら愚痴にもなります。

顧れば數年前國學院を卒業して後、某商業學校に當局の推薦を受けました際、私は既に九大に入る事を決心してゐました。當局の好意を空しくした事は、今でも濟まないと思つてゐますが、かうして先生の御聲咳に接することの出來ましたのは、私にとつて望外の幸福でした。九大に入る事を母校の恩師に御傳へした時、九大にはどういふ先生が居られるかと云はれて、はたと當惑しました。その不用意と無方針とには今でも慚愧に堪へません。豫て御名前だけは薄々存じてゐましたが、先生に對する認識と云ふ樣なものは全く入學後に於てゞしたっ かうして二年間どうなりともやつて參りましたのは皆先生の御蔭でした。

學者として錚々たる人物は世に澤山居られませうが、同時に人格者として自ら立ち、更に誠意を以て後輩の指導に當り得る人は極めて少ないのではないかと思ひます。私共が長い間小學校、中學校と段々上級へ學校教育を受けて行くにつれて、何時か感情の無い個人主義的な人間に墮して行くのを覺えます。學校教育の缺陷をまざ〳〵見せつけられ、知識の切實と云つた樣な感じを痛切に味はつて來ました私は、人間完成への努力が卽ち學校教育であるとは考へられなくなりました。それらの問題の上に新しい疑惑を次から次へと投げかけて來ました。そしてこの問題に解答を與へて下さつたのが先生でした。從來私が眞に恩師として、尊敬し感謝の誠を捧げ得る人は唯一人小學校の先生でした。そして今又その最後の途上に於て先生に御會ひすることの出來たのは何と云つても無上の喜びです。學問的に御啓發下さいましたことは申すまでもなく、より以上に精神的に御教化下さいました。先生から御目を掛けて頂く最後の一人として、私は御禮の言葉を知りません。

私は學問的才能はもとより、教育的才能も統禦的才能も何一つ備はつて居りません。それに就きましては、止むを得ずとは云ふものゝ暫らくの間、會の幹事をさせて頂いたことを御詫び致さなくてはなりません。何時まで經つても雀の踊で、中學生の昔、辯表を提出した時と同じ氣持で幾度かその不甲斐なさを自ら嘆じました それにも拘らず、つい先生の溫情をいゝことにして空しく過して參りました。この事は會の皆樣には誠に相濟まぬことでした唯その間先生の愛情が會員の一人々々にまで及んでゐることを覺りまして、非常に有難く感じました。眞の教育の對象は、秀才より以上に凡人に於て見出されなければならないと思ひますが、先生は身を以て範を示して下さいました。先生は秀才の方々にはそれ相應の御指導をなさいましたことはもとよりですが、私共凡人をも決してお捨てになりませんでした。先生の御風丰は私共の終生忘れ得ないものとなりました。

こんなわけで私は何一つ先生の御衣鉢を繼ぐことが出來ません。唯御迷惑と御心配ばかりお掛け致しました。けれども唯一つ先生からお受けした御風韻は、その一端なりとも私自身のどこかに止め置きたいと云ふのが、さゝやか乍ら私の念願です。

先生には申上げたいことが澤山ありますけれども、私はその任でありません。かつて失禮と思ひますから、すべては先生の御衣鉢を繼がれた先輩の方々に御讓り致します。末筆ながら先生の御健康を御祈り致します。

（昭和十三・五・三十）

八年

平井秀文

雨であつた、去る日まで續いた。

降る音に近く机を明障子によせて、日すがら何かと目を通した。

秋冷えが嚴しかつた。寺僧は絶えず炭をついだ。築土の外の石疊を行く足音が、かなり離れてゐるこの庫裡まで聞えてきた。疲れると、片手を火鉢にかざしながら、聽くともなくそれに耳を傾けた。

雨の日のほのかな明るみでは、古き筆の跡は、打ちすかし調べてもなかなか判じ難かつた。先覺の言葉が身にこたへてありがたく尊かつた。かうもあつたであらうといふ念が、しきりに湧いてきた。わが先生の御ことを思ひ奉ると、わが暮らしが愧づかしかつた。

この冬、京都に初めて一夜をすごした。

ゆうべの街に散つてゐた粉雪は、けさはこの北山に深かつた。陽の光りが、新しい雪をすこし溶かせたのであらう、上の方は輝いてゐる。童に教へられて、ゆるい登りを辿つた。離宮の前に出る、ここを畏んで右に沿うて折れた、車が駐つてゐる。聞いて右に曲り、山に向かふと、やがて一すぢ道の雪のかなたに、行く人々のうちに、わが先生のお姿を仰いだ。寒さを忘れた。かうしてこの途に測らず拜する、師の跡をゆくといふことは、弟子としては何よりも喜びである。先生を仰ぎ奉る念が、いまさらに大きく迫つてきた。

その先生が、この春、還曆の齡に達せられた。

講筵に侍ること三年、留まつて學苑に四年を空しうし、その日を同じうしてそれを辭する、しかもなほ茲にあつて御導きを忝うする。數へてまさしく八年のこの秋。不肖のこの一門弟は何をな

したか。遂に入室の弟子たり得ぬは性不敏やむなしとするも、努めてなほそのいささかをも祖述する能はぬとは。先生の衣鉢を繼ぎ、その師名を愧づかしめぬを以て自ら任ずる人はあらう。私はその門をくぐつたさいはひを以てせめてもの寂しき喜びとはしつつ、さても何を以てこの換へ難き師恩の一に報い奉らむとはする。

昭和十三年十一月この秋再び海峽を越えて旅せむとするに

青　敏　夫

春日先生還暦の賀筵に侍りて

御祝を受けさせ給ふ師の君の面仰ぎつゝ涙うかばふ

記念講演

十一番教室ぬちの靜寂破りてこだまする恩師が御聲に吾は聞き入る

祝賀宴

團欒して君が祝を夏の宵

餘興

角を出すでんでん虫に見入りけり

藤野邦雄

賀筵に列して

新しく生れむと宣らす師のみこゑおごそかにして盞きろかも

うら〳〵と照れる春日のみひかりを浴みし一人そはぎの杯あぐ

――總　會――

昭和十三年五月、春日先生の御還暦の記念事業が催されるに當り、遠近から多數卒業生の來福が豫想された。そして記念會とは別に、國文學會員だけで先生に御還暦の御祝を申上げる會合が欲しいといふのが誰でもののぞみになつたのでこれを機會に總會が催されることになつた。國文學會で總會と銘うつた會合は未だなかつたのでこれが第一回の總會となつたわけである。

第一回總會は記念式典の翌日、すなはち、五月二十九日日曜日に行はれることになつた。この日春日先生には記念式典、展觀、講演等の御疲れで反つて御迷惑ではあるまいかといふのが幹事の心配であつたが、國文學會を第一とせられる先生はそれにもかゝはらずよろこんで御來臨になり出席者に深いよろこびを與へて下さつた。

總會は午前十時から三畏閣の桐の間で行はれた。三畏閣を御存知でなかつた卒業生の方も多かつた。三畏閣は灣鐵箱崎松原驛のすぐ横にある新しい學生集會所である。大學の構外にあつて一寸不便だが松の一むらにつゝまれて木の香も新しく眺望もよく、しかも日本間でかういふ會合にはふさはしかつた。「昔はこんなものもなかつたなあ」といふやうな會員の聲も聞えた。

總會の議事の第一は春日先生を名譽會長に推戴する件であつた。無論、滿場一致　第二は定欵の變更であつた。これには相當の時間を要した。會員の不幸に對する弔慰方法や、會費の增額や定欵變更規定の改正などが主なるものであつた。結局、弔慰は、本人の場合三圓、一等親の場合は適宜にはからふこと、會費はこのまゝで試驗的にやつてみること、定欵の變更は總會で行ふこと改正した內容は次の機會に全會員に通知すること、等の事が決議された。

次で自己紹介に入り會は一段と和かなものになつた。五時記念撮影ののち散會した。當日の出席者は次の通りであつた。

（順序不同）

藤井　毅　　高木正藏　　北島義夫
笹月清美　　金子善次郎　　新谷恒藏
平井秀文　　井浦安喜　　馬場純一
山本安廣　　松村次男　　林川敏雄
横山　正　　藤野邦雄　　高橋重二郎

城島恒雄　古賀英雄　今井保司郎
青　敏夫　高石康男　矢野文博
益永慰隆　岩崎宗次郎　内海　孝
東　秀吉　屋嘉嗣明　藤井重一
秋山正次　瀬利さくを

尙當日春日先生は御還暦の記念として一金百圓也を國文學會に寄贈せられた。會は謹んで之を頂戴し基本金の一部に加へることとなつた。全會員の皆樣に御報告申上げる次第である。

編輯後記

「春日先生還暦記念將輯號」を皆樣の前に御送り致します。記念特輯號と申すには、餘りに體裁整はず先生にも、皆樣にも申譯ない事と存じます。何分にも資金困難で、二段に組んだり、字をつめたり致しました、その點御含み下され何卒御許し願ひます。

更に御詫び申さねばならぬ事は、諸種の事情から、又幹事一個人の私的事情で御座いますが、秋山君の應召、引續き同君御尊父の御不幸、そして小生の六ケ月にわたる病院生活等のため、この樣に會誌發行の遲れました事は、何と言つて御詫び申していゝか分りません、只管御許しを乞ふ次第で御座います。

從つて、「今春」等の文字が一月發行の現在から見て、そぐはない樣な事も起つて來ましたが、私共が訂正するのはいかゞと存じその儘に致し置きました。又御寄稿配列の順序も、大體卒業年度順に致しましたが、既に活字が組に廻つてゐた後のものもありまして、幾分前後したもの、又體裁上、歌の如き最後に配したり致しました、御了承願ひます。

最後に、重ねて、幹事としての任を十分果し得ませんでした事を、深く御詫び申上げます。

（井上）

昭和十三年度第二學期講義題目

連歌及俳諧　小島助教授
西鶴演習　小島助教授
近松演習　小島助教授
國語音韻史　笹月講師
萬葉集演習　笹月講師
大和物語演習　笹月講師
源氏物語（臨時講義）　島津講師

昭和十四年一月二十五日印刷
昭和十四年二月一日發行

編輯兼發行者　井上彰
秋山正次

發行所　九州帝國大學國文學研究室
福岡市極樂寺町六番地

印刷者　兒玉敬治
福岡市極樂寺町六番地

印刷所　九州印刷株式會社